

ネット炎上関連投稿経験者の特徴と批判の動機¹

——ウェブモニタ調査による検討——

吉野 ヒロ子

【要旨】

ここ数年、炎上が社会問題となっている。炎上に参加する者は、ネットユーザーの中ではごく少数であることが知られているが、どういう特徴を持つのか、なぜ参加するのかについては、まだ明らかになっていないことが多い。本論文では、まず先行研究から炎上参加を説明するモデルを「憂さ晴らしモデル」「サイバーカスケードモデル」「社会的制裁モデル」の3つに整理し、これらのモデルを2つのウェブモニタ調査のデータによって検討した。その結果、(1) 炎上に関してネットに投稿するかどうかについては言語的攻撃性が影響している (2) 炎上の対象を批判した動機は、類似した意見を持つ者で盛り上がる「祭り」型、社会規範を侵犯した者を攻撃しようとする「制裁」型が考えられる (3) 「制裁」型の参加動機が強い批判経験者は、そうではない批判経験者よりも、経済的状況に不満を持っている傾向と、ストレスが溜まっている傾向があることが明らかになった。

キーワード：炎上、ソーシャルメディア、Twitter、ウェブモニタ調査

1 本論文は博士論文「ネット炎上を生み出すメディア環境と炎上参加者の特徴の研究」(中央大学大学院文学研究科)の、独立した論文として発表していない部分を加筆修正したものである。

1. はじめに

ゼロ年代なかばから、国内外でソーシャルメディアや掲示板などCGM (Consumer Generated Media) 上で、他人の言動に批判が殺到する現象が頻繁に見られるようになってきている。この現象は国内では「炎上」、英語圏では「Online Fire Storm」「Online Shaming」など、中国では「人肉搜索」と呼ばれており、国内だけで年数百件発生していると推計されている（田中・山口 2016）。Rost et al. (2016) は、炎上を「大量の批判、侮辱的なコメント、罵倒が、個人や組織、集団に対して行われ、数千または数万の人々によって数時間以内に伝播されるものである」（Rost et al. 2016 : 2）と定義している。

炎上とは奇妙な現象である。たとえば、2013年に高知県のコンビニ従業員が店舗のアイスケースの中に寝そべり、その様子を撮影してネットに投稿し、騒動になった事例がある。従業員の個人情報にはネットに晒され、抗議はコンビニチェーン本部にも及び、謝罪とともに従業員の解雇、フランチャイズ契約の解除、店舗の休業が発表された。だが、この事例で批判した人々の多くは、おそらくそのコンビニの存在も知らなかっただろうし、今後に行くことはなかったはずである。なんの利害関係もない出来事に対して、なぜ多くの人々が感情的に反応し、大企業が対応せざるをえないような騒動に発展するのだろうか。

炎上の対象をネット上で批判したことがある者はごく少数であることが知られている。山口（2015）は、ウェブモニタ調査（2014年11月実施・n=19992）から、炎上した者を批判する投稿をしたことがある者は1.5%と報告しており、田中・山口（2016）では、同調査の結果から、炎上参加者（批判した経験がある者）はネットユーザーのうち0.5%、数十万人程度と推計している（田中・山口 2016）。吉野（2016）のウェブモニタ調査（2015年8月実施・n=945）の結果でも、炎上した者を批判したことがあると回答した者は0.8%で、炎上事例に関する投稿を拡散した経験があると答えた者は2.8%だった。文化庁（2017）は、個別面接調査（2017年2～3月実施・

有効回答数 2015 人 [有効回答率 56.5%]) の結果、炎上を目撃した際に書込や拡散をするかという問いに対して、「大体すると思う」と答えた者は 0.5%、たまに思うと思うと答えた者は 2.2% だったと報告している。

吉野 (2016) の調査では、炎上を認知している者は 83.8%、炎上について検索したことがあると答えた者は 15.7% だった。実際に投稿するのはごく少数だが、多くの人が炎上を認知しているし、関心も持っていると言える。では、ネット上で批判する者としない者との違いはどこにあるのだろうか。なぜ人が炎上で対象を批判するのかについては、先行研究である程度論じられている (後述)。それらを「憂さ晴らしモデル」「サイバーカスケードモデル」「社会的制裁モデル」の 3 つに分け、それぞれのモデルから想定される個人特性を推測して検討したい。

ただし、炎上で批判する者は一律の動機を持っているとは限らない。たとえば山口 (2016) は、炎上の対象を批判した理由を事例別に訊ね、「間違っていることをしているのが許せなかった」など正義感から批判している「正義感」型が 60 ~ 70%、「多くの人々が書き込んでおり、自分も参加すべきだと感じたから」などを選択した「便乗」型が 10 ~ 20%、「色々書き込むのが楽しいから」を選択した「楽しみ」型が 20% 前後だったと報告している。もし炎上した者を批判する動機がいくつかに分かれているのなら、「正義感」型なら規範意識が強いなど、動機によって異なる個人特性を持つ可能性もあるだろう。

炎上の対象を批判した経験がある者は、一般的なウェブモニタ調査での出現率が低いため、本論文では炎上で批判した経験がある者の特徴の記述を段階的に試みる。具体的には、(1) ウェブモニタの中で、投稿経験者は非経験者と比べてどのような特徴を持つか (研究 1)、(2) 投稿経験者の中で、批判的な投稿をしたことがある者は、批判的な投稿をしたことがない者とくらべてどのような特徴を持つか (研究 2)、(3) 批判的な投稿をした者の動機は類型化できるのか、動機タイプによって個人特性は異なるのか (研究 2) を検討したい。方法としては、(1) を検討する研究 1 はスクリーニングなしのウェブモニタ調査、(2) と (3) を検討する研究 2 は投稿経験者に絞った

スクリーニング調査を用いる。

2. 誰が炎上について投稿し、炎上した者を批判しているのか

まず、内容に関わらず、炎上事例に関して「投稿」をしたことがある者は、したことがない者とどこが異なるのだろうか。吉野・小山・高田（2018）ではPCデボ炎上（2016年）とラーメン二郎仙台店炎上（2017年）に関するTwitterの投稿データの検討を行った。データからは炎上した者への攻撃や批判、擁護だけでなく、炎上事例からなんらかの教訓を引き出そうとする投稿や、状況をまとめた投稿、ネタ化した投稿など多様な投稿があることが確認できた。PCデボ炎上については批判的な投稿が30.4%、ラーメン二郎仙台店炎上については12.2%だった²。ただし、炎上前と比べれば批判的な投稿や攻撃的な投稿の比率が増大しており、通常より投稿が荒れている状態となっていた。

さまざまな人々の注目を集めている炎上のさなかで自分の意見を投稿すれば、他のユーザーに共感してもらえたり賞賛されたりする可能性がある一方、反論されたりトラブルになったりする可能性も通常より高くなると考えられる。そのため、反論やトラブルを避けたいと思う者は、炎上に興味を持って、意見は投稿しにくいと考えられる。逆に言えば、炎上事例について投稿した経験がある者は、このようなりスクがあっても投稿する者ということになる。このことから、投稿経験者はまずBuss-Perry攻撃性尺度の「言語的攻撃性」（言い争いになる可能性があっても、自分の意見を明言する傾向を測定する心理尺度）が高い可能性がある（安藤ほか1999）。

また、投稿経験者は炎上に関する情報接触にも特徴があると考えられる。吉野ほか（2018）では、テレビなどマスメディアでの報道や、ネットニュース、まとめサイトの記事がTwitterでの炎上に関する投稿の盛り上がりに影響

2 先行研究では、東芝クレーマー事件（1999年）に関する「Yahoo!掲示板」への投稿で東芝に批判的なものは43.1%（三上2001）、東京オリンピックエンブレム問題（2015年）に関するTwitterへの投稿で28.5%（田中2016b）と報告されている。

響している事例があること、吉野（2015）では炎上に関する情報の認知経路が炎上への態度形成に影響していることを報告した。だが、これらの報道には投稿の盛り上がりに対して、一定のタイムラグが発生する。普段から Twitter や 2ちゃんねる³ などを利用し、それだけでなく炎上に関する投稿で盛り上がっているところをリアルタイムで目にしていてる者の方が、投稿を誘発されやすいと考えられる。

炎上に関する行動反応としては、意見の投稿だけがあるわけではない。まず、炎上に興味を持って、検索するという行動が考えられる。また、自分の意見は投稿しなくとも、拡散（Twitter でのリツイートや Facebook のシェアなど）で、炎上に関する情報を自分とつながっている人に知らせようとする行動も考えられる。

検索はしたが拡散や投稿はしなかった者は、「炎上に興味を持ったが、参加しなかった者」、拡散はしたが投稿しなかった者は、「炎上に興味を持ち、炎上に関する情報を他のユーザーに伝えたが、自分の意見は投稿した者」と考えられる。つまり、炎上に関する行動として、意見投稿だけがあるのではなく、より関与の浅い検索や、検索だけよりは関与が深い、投稿よりは関与が浅い拡散という行動があると捉えることができる。

この3つの行動は必ず段階を追って行われるわけではない。検索をせずに Twitter などのタイムラインに流れてきた情報に対して拡散や投稿をした、拡散したことはないがネットニュースのコメント欄や掲示板に意見を投稿した経験がある者なども想定される。だが、(1)「炎上に関して検索のみ行った者」(2)「拡散したが投稿はしていない者」(3)「投稿した者」の3群の特徴を比べることで、投稿経験者の特徴をより明確にできる可能性がある。

2.1 投稿経験者の中で、批判的な投稿をしたことがある者はどのような特徴を持つか

では炎上した者に対して批判的な投稿をしたことがある者と、批判的では

3 運営関係者の対立により、大規模掲示板「2ちゃんねる」は2017年10月に「5ちゃんねる」と改称しているが、本論文では旧称を用いる。

ない投稿経験者はなにが違うのだろうか。以下、炎上参加を説明する3つのモデルをもとに検討してみたい。

2.1.1 憂さ晴らしモデル：経済的状況への満足度とストレス

中川（2009）は、ネットニュースの編集者としての経験に基づき、ネットでクレームをつける人々はフルタイムで働いているとは考えにくいほど活発にネット上で活動していることから、仕事を持っていない「暇な人」であると示唆している。同様に、田代・服部（2013）は、炎上関連の投稿をまとめて記事にすることで収益を上げているまとめサイトの広告の内容などから、求職中・失業中で可処分時間に余裕がある貧困層である可能性があると述べている。

こうした見方は十分に学術的な検討を経たものではないが広く見られる。たとえば、ネットメディア評論家の落合正和は「クソリプを送ったり、炎上させたりしている人は、憂さ晴らしをしたいだけのごくごく普通の人だと思います」（キャリコネニュース編集部 2017）と炎上に参加する理由を説明している。精神科医の香山リカは、ネットでの攻撃的な書き込みについて、「実生活が思うようにいかず、インターネットの投稿で憂さ晴らしをしている人が、特に若い世代で多いのではないか」（日本経済新聞 2015年2月17日）とコメントしている。このような見方を（社会に恨みを持つ低所得者層による）「憂さ晴らし」モデルと呼ぼう。

だが、田中・山口（2016）は、炎上参加者（批判経験者）には世帯年収が高い傾向があると報告している。吉野（2016）のウェブモニタ調査の分析結果では、炎上参加経験に対して世帯年収の効果は認められなかった。現状、低所得者が炎上に参加しやすい傾向があることを支持する報告はない。とはいえ、世帯年収にかかわらず、経済的状況への満足度が低い者や、経済的状況以外の要因も含めてストレスを溜めている者が参加しやすい傾向があるかどうかはまだ検討されていない。

2.1.2 サイバースカケドモデル：社会的寛容性

荻上（2007）は、サイバースカケド（意見が似た者がネット上でつながりを持つことで、意見の先鋭化が起きる現象）が炎上の背景にあると指摘し

ている。このような現象は、自分と似た意見の持ち主を探しやすく、かつ情報接触を自分の志向に応じてカスタマイズすることが容易なネットのメディア特性から生じやすくなっていると考えられる。

河島（2014）と小峯（2015）は、炎上に関する掲示板や Twitter での投稿の内容分析を行い、一度批判的な論調に傾くと、流れに逆らって炎上の対象を擁護する意見が書き込まれても、無視されたり反論されたりして批判的な論調が維持されることが少なくないと報告している。これらの結果を、サイバーカスケードによる意見の強化が発生していると見るができるだろう。

サイバーカスケードモデルが炎上の動機についても適合的であれば、炎上した者に対して批判的な投稿をする人々は、同じ意見を持つ者同士で盛り上がることを好むと思われる。炎上した者に対して、否定や反感などネガティブな感情を強く抱いていなくても、周りの人が批判しているから批判しているとも言える。このようなモデルで炎上した者への批判的な投稿が行われているならば、投稿者は多様な意見を受け入れることを好まない可能性があり、異なる意見を許容する「社会的寛容性」傾向（小林・池田 2008）が低いことが推測される。

2.1.3 社会的制裁モデル：社会認識傾向と社会考慮傾向

Rost et al. (2016) は、ドイツの代表的な署名サイトの投稿を分析し、実名で書き込まれていること、unfair や injustice など公正概念に関わる単語を含むことなどが、投稿に含まれる攻撃的な表現の量に正の効果を持つと報告している。田中・山口（2016）は、炎上には社会的制裁という側面があると指摘している。あわせて、中川（2009）や平井（2012）は、炎上の特徴として、直接的な利害関係のない第三者が批判に参加することを挙げている。なぜ利害関係がないのに制裁に参加するのかを考えると、炎上の対象を批判したことがある人々は、そうではない人々よりも、社会への意識が高く、社会に対して害となりうる行為に敏感な傾向を持つ可能性がある。

社会に対して害となりうる行為といっても、炎上のきっかけとなる言動は、殺人などの重犯罪ではないことが多い。コンビニの冷凍庫に入ったり、バイト先の食べ物で遊んだりした画像を投稿する、来店した著名人の個人情報を

投稿するといった、炎上によくある行為は、法的には業務妨害罪などに相当することもあるが、炎上の対象となった行動が実際に法的処罰を受けた事例は、刑事・民事問わずそれほど多くはない。企業の炎上では、CMの差別的な表現などが問題になったりすることが多いが、これらも法的に罪として問われるものではない。炎上のきっかけとなる行為は、ただちに逮捕されるような犯罪行為ではなく、社会的規範に反してはいるが、罪を明確に問にくい行為であることが多いと言える。その意味で、迷惑行為のような不特定多数の利益を損なうが犯罪とまでは言えない行為や、罪に相当はするが実際に起訴されることが稀であるような行為が及ぼす悪影響に敏感な人々が、炎上に参加しやすいのではないかと考えられる。

吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折（1999）は、社会的迷惑認知と「社会認識」傾向および「社会考慮」傾向の関連性を検討している。「社会認識」とは、法や規則、他者との協力が社会の中でもつ意味をどの程度重く認識しているかというもので、規制的社会認識尺度（社会規範をそれぞれが守ることで社会が維持されていると認識しているかどうか）と共生的社会認識尺度（互いに助け合うことで社会が維持されていると認識しているかどうか）の2つの下位尺度から構成される。「社会考慮」とは社会そのものや、社会を構成する個人と社会のつながりについて考える傾向である。吉田ほか（1999）は、「社会認識」傾向と「社会考慮」傾向は、社会的な迷惑行為の感じやすさに影響していると主張している。

炎上を、罪に問にくい行為に対する社会的制裁の一種として捉えるなら、炎上関連行動経験者は、「社会認識」傾向および「社会考慮」傾向が高いことが推測される。

2.1.4 批判動機の類型化と動機タイプによる特徴の違い

平井（2012）と伊藤（2014）は、炎上与2ちゃんねるの「祭り」が地続きであると指摘している。2ちゃんねるの「祭り」とは、インターネット上の呼びかけを元に不特定多数が参加するイベントのことである。「吉野家祭り」（2001年など）や、タレントの田代まさしを、米「タイム誌」のパーソン・オブ・ザ・イヤーの1位にしようと投票を呼びかけた「田代祭」などが代表

的な事例である。「祭り」には攻撃的なものもあり、2004年に起きた「JOY祭り」⁴と呼ばれる主婦のブログへのバッシングは、炎上とほぼ同じプロセスを辿っている（荻上 2007）。

炎上には「祭り」と同じく、ネットでつながる不特定多数が、呼応して同じ行動を取ることで盛り上がるという側面があると考えられる。そこでは、加虐的な楽しみが共有されているのかもしれない。

一方で、炎上には、「祭り」のような悪乗りの暴走によってのみ生じているとは言えない面がある。特に企業に対する炎上は、「グルーポンおせち」騒動⁵のように一種の消費者運動としての側面も持っている。

そもそも炎上のきっかけとなる事件や投稿は、賛否両論含め批判する側にも理があるような事例も少なくない。小林（2011）は、典型的な炎上パターンを、「やらせ・捏造・自作自演」「なりすまし」「悪ノリ」「不良品・疑惑・不透明な対応」「コミュニティ慣習・規則の軽視」「放言・暴言・逆ギレ」の6類型に分類している。いずれも炎上の対象となった側に一定の非があると言える。これらの行動が間違っていると多くの人が感じるからこそ、不特定多数による攻撃が発生すると考えられる。

これら先行研究から、炎上には「祭り」の側面と「制裁」の側面があると考えられる。「祭り」とは、リアルタイムで不特定多数と盛り上がる中で、時には批判が暴走していく側面であり、「制裁」は社会的な規範を冒した者を制裁し、規範を保とうとする側面である。

4 「JOY祭り」とは、飲食店内で走り回った自分の子供を注意した店員を、夫らが殴ったことを自慢したJOYというハンドルネームの主婦のブログを攻撃した「祭り」の一つである。このブログが2ちゃんねるの「既婚女性板」に転載された結果、ブログのコメント欄に批判が多数書き込まれた。また、主婦の本名や自宅の画像、オークション履歴などの個人情報が出され、ブログの書き込みから他にも不法行為をしている可能性があるとして、関係機関に通報が行われた。主婦は謝罪して、ブログを閉鎖した（荻上 2007）。

5 共同購入型クーポンサイト「グルーポン」（<https://www.groupon.jp/>）を利用して販売された飲食店の宅配おせち料理の配送が遅れ、中身も事前の商品説明と大幅に異なるとして問題になった事例。スタッフのソーシャルメディアへの投稿から衛生管理が不十分な環境で詰め合わせ作業が行われたことも発覚し、炎上した飲食店は閉店した。また、「グルーポン」アメリカ本社は、CEOが謝罪する動画をYouTubeで公開した（小林 2011）。

これに対応して、批判する動機には「祭り」型と「制裁」型の2つの次元があるのではないかと推測できる。これら2つの動機類型は、それぞれ異なる個人特性と結びついている可能性がある。

「祭り」型は盛り上がりの楽しさを重視して炎上の対象を批判するものである。サイバースケードモデルにより適合的であるため、「祭り」型動機が強い批判的経験者は社会的寛容性が低い傾向があると推測できる。

一方、「制裁」型動機が強い批判経験者は、規範を逸脱した者への制裁として炎上に関与していると考えられる。社会的制裁モデルにより適合的であり、社会への意識が高く、また規範意識が強い可能性がある。したがって、「社会認識」傾向および「社会考慮」傾向が強いと推測できる。

2.2 本研究の仮説

以上の議論を踏まえ、本論文では、炎上の対象をネット上で批判した経験のある者だけでなく、炎上に関して検索・拡散・なんらかの意見を書き込んだ者の特徴を検討したい。

本研究の仮説は、以下の3群（計9）である。

2.2.1 仮説1：炎上関連投稿経験者について

炎上に関する投稿は、吉野ほか（2018）でTwitterの投稿データを検討したように、批判的でもなく攻撃的でもないものが大半である。だが、炎上参加に関する3つのモデルは、炎上の参加を炎上している者への批判と捉えている傾向がある。そのため、3つのモデルから想定される個人特性は、炎上について投稿するかしないかではなく、炎上している者を批判するかしないかで現れると考えられる。

では、炎上に関連して投稿したことがある者となない者は、なにが異なるのだろうか。先に述べたように、炎上に関連して投稿することには一定のリスクがある。そのため、投稿経験者と非経験者と比較すれば、言い争いになる可能性があっても言いたいことを言う傾向が強いと考えられる。また、炎上関連投稿経験者は、炎上が盛り上がるTwitterや2ちゃんねるで、炎上に関する情報を眼にしている可能性が高いと推測できる。

仮説 1 - 1：炎上関連投稿経験者は、未経験者と比べて、言語的攻撃性が高い

仮説 1 - 2：炎上関連投稿経験者は、未経験者と比べて、Twitter や 2 ちゃんねるなど炎上が盛り上がる CGM・ソーシャルメディアで炎上に関連した情報を目にしている頻度が高い

2.2.2 仮説 2：炎上した者に対する批判的な投稿経験者について

仮説 2 は、炎上に関連した投稿をしたことがある者の中で、批判的な投稿をしたことがある者がどのような特徴を持つかを検討するものである。ここで「憂さ晴らしモデル」「サイバークスケードモデル」「社会的制裁モデル」から想定される属性の違いが現れると推測する。

憂さ晴らしモデルは、なんらかの不满（特に経済的状況についての）やストレスの捌け口としてネット上で攻撃・批判を行っているとは推測するものである。サイバークスケードモデルは、似たような意見をもつ者同士が同調することで、ネット上の攻撃・批判が高まっていくと説明するものである。そのため、異なる意見を許容する社会的寛容性が低いと推測する。社会的制裁モデルは、社会の秩序を保つために規範を逸脱した言動に対して攻撃・批判を行うというものである。そのため、炎上参加者は迷惑行為を認知しやすい社会考慮および社会認識傾向が高いと推測できる。

仮説 2 - 1：批判的な投稿経験者は、批判的な投稿をしたことがない投稿経験者と比べて、経済的状況への満足度が低い（憂さ晴らしモデル）

仮説 2 - 2：批判的な投稿経験者は、批判的な投稿をしたことがない投稿経験者と比べて、ストレスが溜まっている（憂さ晴らしモデル）

仮説 2 - 3：批判的な投稿経験者は、批判的な投稿をしたことがない投稿経験者と比べて、社会的寛容性が低い（サイバークスケード

モデル)

仮説 2 - 4: 批判的な投稿経験者は、批判的な投稿をしたことがない投稿経験者と比べて、社会考慮傾向が高い (社会的制裁モデル)

2.2.3 仮説 3: 炎上した者に対する批判的な投稿の動機について

仮説 3 - 1 は、炎上の対象を批判する動機を予測するものである。炎上が「祭り」と「制裁」の 2 つの側面を持っていることから、炎上に参加する動機は「祭り」型動機と「制裁」型動機が区別される可能性がある。仮説 3 - 2 は、「祭り」型動機が強い批判経験者は、同じ意見を持つ者で盛り上がるために炎上に参加すると考えられるため、社会的寛容性が低い傾向があると推測するものである。対して、仮説 3 - 3 は「制裁」型動機は、炎上の対象が社会規範を逸脱したと認識し、逸脱を是正するために批判するものであるため、「制裁」型動機が強い批判経験者は、そうではない批判経験者と比べて、社会考慮傾向が強いと推測するものである。

仮説 3 - 1: 炎上した者を批判した動機には、少なくとも「祭り」型と「制裁」型の 2 つの次元がある

仮説 3 - 2: 「祭り」型動機が強い批判経験者は、そうでない批判経験者と比べて、社会的寛容性が低い

仮説 3 - 3: 「制裁」型動機が強い批判経験者は、そうでない批判経験者と比べて、社会考慮傾向が強い

また、これらの仮説と合わせて、吉野ほか (2018) で検討した炎上の認知経路が、投稿経験の有無、批判経験の有無に効果を持っているかどうかを検討したい。吉野ほか (2018) では、炎上に関する情報に接したメディアによって、炎上への態度形成が異なることを報告した。これは、メディアによって炎上の取り上げられ方が異なるためと思われる。認知経路が炎上への態度形成に影響しているのなら、炎上に関連した行動に、炎上についての情報をどのメディアで知ったのかが、一定の効果がある可能性がある。

先述したようにウェブモニタ調査を用いた先行研究での批判経験者の出現率は、山口（2015）で1.5%、吉野（2015）で報告した調査結果でも0.8%と低い。そのため、スクリーニングを行わないウェブモニタ調査データから炎上関連行動経験者全般に関する仮説1の検討をし（研究1）、別途、炎上に関してインターネット上でなんらかのコメントした経験がある者をスクリーニングによって抽出したウェブモニタ調査から批判経験者の傾向に関する仮説2と3の検討をする（研究2）。

3 研究1：炎上関連行動経験者についての仮説の検討

3.1 調査概要

前述の仮説1を検証するため、炎上に関してソーシャルメディアなどに書き込んだ経験がある者の傾向を、経験がない者（ソーシャルメディア未利用者も含む）と比較することを目的として、株式会社マクロミルのサービスを利用してウェブモニタ調査を行った。調査期間は2016年7月12日から2016年7月14日である。対象年齢を18歳以上とし、年齢の上限は設定せずに2010年国勢調査に基づいて、年代・性別で層化した上で配信を行い、1240名の回答を得た⁶。

ウェブモニタ調査には、モニタが調査協力のポイントを効率よく得るために設問をあまり読まずに回答するSatisfice問題（三浦・小林 2015）があることから、反転項目を含む心理尺度設問（自己効力感尺度3問・孤独感尺度5問をまとめて尋ねたもの）で、すべて同じ選択肢を選んでいる回答者および極端に回答時間が短い者⁷を除いた1119名を分析の対象とした（表1）。

6 本調査データは中央大学教授安野智子先生の許可を頂いて利用させていただきました。記して感謝します。

7 回答時間は平均10分、中央値が9分、最頻値が7分であったため、3分で答えている回答者6名を除外した。6名のうち5名は、反転項目を含む心理尺度設問ですべて同じ選択肢を選んでいた。

表1 回答者の性別と年代 (n=1119)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
男性	14	87	114	104	98	116	533
女性	18	92	125	111	110	130	586
合計	32	179	239	215	208	246	1119

年代別の主要 CGM・ソーシャルメディア利用率をまとめたものが表2である。総務省（2016）など他のソーシャルメディア利用に関する調査と同じく、若い世代の利用率が40代以上の世代より高い傾向がある。

表2 年代別主要 CGM 利用率 (n=1119)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
LINE	30	133	152	98	97	58	568
	93.8%	74.3%	63.6%	45.6%	46.6%	23.6%	50.8%
Twitter	25	95	90	71	48	32	361
	78.1%	53.1%	37.7%	33.0%	23.1%	13.0%	32.3%
Facebook	10	73	99	60	62	49	353
	31.3%	40.8%	41.4%	27.9%	29.8%	19.9%	31.5%
2ちゃんねる	12	48	74	59	27	17	237
	37.5%	26.8%	31.0%	27.4%	13.0%	6.9%	21.2%
ニュースサイトのコメント欄	2	34	45	38	36	21	176
	6.3%	19.0%	18.8%	17.7%	17.3%	8.5%	15.7%
どのサービスも利用していない	1	16	32	50	51	130	280
	3.1%	8.9%	13.4%	23.3%	24.5%	52.8%	25.0%
該当者数	32	179	239	215	208	246	1119
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

3.1.1 従属変数

「炎上に関連する情報を検索した」（以下「検索」）・「情報を拡散した」（同「拡散」）「炎上している人や組織への批判や、炎上への意見をネットに書き込んだ」（同「書き込み」）頻度を、それぞれ4件法で訊ねた結果が表3である。回答者のうち440名（39.3%）が3つの行動のうちいずれかの行動を経験していた。

表3 炎上関連行動頻度 (n=1119)

	頻繁に	ときどき	1、2回	したことがない	合計
検索	33(2.9%)	200(17.9%)	203(18.1%)	683(61.0%)	1119(100.0%)
拡散	7(0.6%)	27(2.4%)	37(3.3%)	1048(93.7%)	1119(100.0%)
投稿	2(0.2%)	25(2.2%)	29(2.6%)	1063(95.0%)	1119(100.0%)

投稿するかしないかについては、日頃 CGM に投稿しているかどうかの影響すると考えられる。田中（2016a）は、ウェブモニタ調査（2016年6月 n=40504 の予備調査から 2017 名をスクリーニング）の結果、炎上攻撃者（批判的な投稿経験者）277 名の投稿先が、該当者が多い順に「2ちゃんねる」などの掲示板（128 名・46.2%）、Twitter（126 名・45.5%）、ネットニュースのコメント欄（72 名・30.0%）だったと報告している。今回の調査結果でも、全体では炎上に関連した投稿経験者は 5.0% だが、Twitter の利用者 361 名のうち投稿経験者は 37 名（10.2%）、2ちゃんねる利用者 237 名のうち投稿経験者は 35 名（14.8%）となり、Twitter と 2ちゃんねるの双方を利用している者 141 名のうち投稿経験者は 26 名（18.4%）となった。Twitter も 2ちゃんねるも利用していない者 662 名のうち投稿経験者は 10 名（1.5%）だった。Twitter と 2ちゃんねる利用者の炎上関連投稿経験率は高く、特に両方を利用している者が高いという結果になった⁸。

炎上関連行動の経験率について、性別ごとに集計を行ったところ、検索経験者は、男性で 222 名（41.7%）、女性で 214 名（36.5%）、全体で 436 名（39.0%）となった。拡散経験者は、男性で 49 名（9.2%）、女性で 22 名（3.8%）、全体で 71 名（6.3%）となった。「投稿」は男性で 46 名（8.6%）、女性

8 吉野ほか（2018）で検討したラーメン二郎仙台店炎上（2017 年）に関する Twitter への投稿データからも、Twitter での炎上に関する投稿と 2ちゃんねるとの深い結び付きが伺われる。ラーメン二郎仙台店炎上では、炎上のきっかけとなる Twitter への投稿がなされた 2 分後に、2ちゃんねるで最初のスレッドが立てられ、30 分後には最初の 2ちゃんねるまとめサイトの記事が公開されている。PC デボ炎上（2016 年）でも、2ちゃんねるまとめサイトの記事が Twitter で言及された URL の上位に入っていた。Twitter で発した火種が 2ちゃんねるに飛び火し、2ちゃんねるでの盛り上がりや Twitter の投稿に影響するといった相互に影響を与えあう関係にあると考えられる。

で10名（1.7%）、計56名（5.0%）となった。すべての行動で男性の経験率が女性を上回り、特に「投稿」で差が大きくなっている。年代別に経験率を見ると、いずれも若い世代で経験率が高いが、「検索」については50代以上が65名（31.3%）、60代以上も58名（23.6%）が行っており、投稿や拡散はしなくとも、炎上に関心を持つ人は中高年層にも広く存在すると考えられる（表4）。

表4 年代別炎上関連行動経験率（n=1119）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計
検索	15(46.9%)	87(48.6%)	118(49.4%)	93(43.3%)	65(31.3%)	58(23.6%)	436(39.0%)
拡散	6(18.8%)	22(12.3%)	19(7.9%)	15(7.0%)	4(1.9%)	5(2.0%)	71(6.3%)
投稿	1(3.1%)	20(11.2%)	17(7.1%)	12(5.6%)	3(1.4%)	3(1.2%)	56(5.0%)
未経験者	17(53.1%)	91(50.8%)	229(49.8%)	121(56.3%)	143(68.8%)	188(76.4%)	679(60.7%)
合計	32(100.0%)	179(100.0%)	239(100.0%)	215(100.0%)	208(100.0%)	246(100.0%)	1119(100.0%)

※パーセントは各年代での割合。重複があるため、検索から未経験者までの合計は100%にならない。

炎上に関連した各行動は重複している（表5）。検索経験者436名のうち検索のみ経験がある者は355名（81.4%）、拡散経験がある者が68名（15.6%）、投稿経験もある者が55名（12.6%）となっている。拡散経験者71名のうち、42名（59.1%）が投稿も経験していた。そのため、重複を除いて検討するために、別途、炎上関連行動経験がない者679名対検索経験のみある者355名、拡散経験も投稿経験もない者1034名対拡散経験はあるが投稿経験のない者29名の分析も行ったが、各変数の効果に変化はなかった。

表5 炎上関連行動の重複状況

		投稿経験あり	投稿経験なし	合計
検索経験あり	拡散経験あり	42	26	68
	拡散経験なし	13	355	368
	計	55	381	436
検索経験なし	拡散経験あり	0	3	3
	拡散経験なし	1	679	680
	計	1	682	683
合計	拡散経験あり	42	29	71
	拡散経験なし	14	1034	1048
	計	56	1063	1119

3.1.2 独立変数

仮説1－1を検討するために、独立変数として言語的攻撃性尺度を投入した。また、憂さ晴らしモデル・サイバーカスケードモデル・社会的制裁モデルの妥当性を検討する研究2と比較するため、経済的な状況に対する生活満足度（7件法）と、ストレスが溜まっていると自覚する頻度（5件法）、社会的寛容性尺度、社会考慮尺度（社会考慮・規範的社会認識・共生的社会認識）を投入した。各心理尺度については先行研究で因子負荷量が大きい設問を選択している（表6）。社会的寛容性尺度については、「ソーシャルメディアでつながっている人」を設問の対象に追加している。複数の設問で構成される尺度については信頼性の検定を行った上で、合算値を投入した。

表6 独立変数に用いた心理尺度設問（研究1）

心理尺度名	下位尺度	設問(回答は特記があるもの以外5件法)
Buss-Perry 攻撃性尺度 (安藤他,1999)	言語的攻撃性	意見が対立したときは、議論しないと気がすまない／誰かに不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきり言う 計2問／Pearsonの相関係数は.363** Cronbachの α 係数は.532
社会的寛容性 (小林・池田, 2008)		政治や社会のあり方について、次の(1)～(4)の人と意見が食い違う場合、あなたはどのように思いますか。(1)家族(2)親しい友人(3)同僚・同級生(4)ソーシャルメディアでつながっている人／回答は、「1.意見は違っていてもよい」から「4.意見は同じ方がよい」の4件法で訊ね、回答を反転した 計4問／Cronbachの α 係数は.896
	社会考慮	社会全体がどのような方向に動いているかということに関心がある
社会考慮尺度 (吉田他,1999)	規範的社会認識	社会を住みよくするためには、法律や規則をもっと厳しくすべきだ／規則や法律を破る人は、社会人としての資格がない 計2問／Pearsonの相関係数は.469** Cronbachの α 係数は.638
	共生的社会認識	世の中の人々は、社会全体が暮らしやすくなるように協力すべきだ

**は1%水準で有意

メディア別の炎上情報認知状況についてはテレビ・ネットニュース・TwitterおよびTwitterまとめサイト・2ちゃんねるおよび2ちゃんねるまとめサイトでの炎上認知頻度（表7）の回答を投入した。認知の有無でみると、テレビでの認知経験者が69.0%ともっとも多かったが、「よく見る」と答えた者は、ネットニュースが10.7%でもっとも多く、広く認知されている

のはテレビ経由、頻繁に認知されているのはネットニュースという結果になった。

表7 メディア別炎上関連情報認知頻度

	よく見る	時々見る	たまに見る	見たことがない	合計
テレビ	60 5.4%	278 24.8%	434 38.8%	347 31.0%	1119 100.0%
ネットニュース	120 10.7%	275 24.6%	350 31.3%	374 33.4%	1119 100.0%
Twitter・同まとめサイト	66 5.9%	125 11.2%	182 16.3%	746 66.7%	1119 100.0%
2ちゃんねる・同まとめサイト	66 5.9%	117 10.5%	158 14.1%	778 69.5%	1119 100.0%

3.1.3 統制変数

年齢、性別（男性 = 1 / 女性 = 2）、学歴（大卒以上ダミー）、世帯年収（300 万円未満ダミー / 900 万円以上ダミー / 世帯年収無回答ダミー⁹）の回答、主要 CGM（LINE・Twitter・Facebook・2ちゃんねる）の閲覧頻度の合算値を投入した。

3.2 仮説 1：炎上関連投稿経験者に関する検討

3.2.1 結果

炎上に関する行動（検索・拡散・書き込み）有無を従属変数とする二項ロジスティック回帰分析を行った結果が表 8 である。別途、統制変数として投入したデモグラフィック変数のみで分析を行った結果と、モデル 1・2 の結果を比較したが、効果に変化はなかった。

まず、「仮説 1 - 1. 炎上関連投稿経験者は、未経験者と比べて、言語的攻撃性が高い」は、投稿経験の有無を従属変数とした分析でモデル 1・2 ともに正の効果があり、支持された。検索のみ経験がある者についてはモデル 1・2 ともに行動経験がない者よりも言語的攻撃性が低い傾向があり、炎上に興味を持っても言語的攻撃性が低い人々は投稿や拡散というかたちで炎上

9 世帯年収に関する設問の無回答者が 270 名（24.1%）あったことから、ダミー変数を作成し投入した。

に参加しにくいと考えられる。

「仮説1-2. 炎上関連投稿経験者は、未経験者と比べて、Twitterや2ちゃんねるなど炎上が盛り上がるCGM・ソーシャルメディアで炎上に関連した情報を目にしている頻度が高い」は、投稿経験の有無を従属変数としたモデル2の分析で、Twitterおよび2ちゃんねるでの炎上関連情報接触頻度が正の効果を持っており、支持された。

表8 「炎上」関連行動経験の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析

	[検索]				[拡散]				[投稿]			
	モデル1		モデル2		モデル1		モデル2		モデル1		モデル2	
	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE	B	SE
性別(男性=1 女性=2)	.104	.139	-.029	.151	-.929	.293**	-.800	.306**	-1.747	.385***	-1.640	.410***
年齢	-.012	.005*	.000	.006	-.029	.012*	-.021	.013+	-.030	.013*	-.020	.016
大卒以上ダミー	.099	.141	-.104	.154	.107	.280	.081	.294	.039	.317	.077	.347
世帯年収300万未満ダミー	-.142	.202	.001	.218	.140	.398	-.011	.420	.808	.397*	.699	.436
世帯年収900万円以上ダミー	-.136	.232	-.035	.251	.337	.416	.256	.441	.108	.491	-.018	.540
世帯年収無回答ダミー	-.062	.166	.032	.178	.135	.350	-.013	.372	-.037	.432	-.203	.472
CGM閲覧頻度	.051	.018**	.059	.022**	.195	.031***	.106	.035**	.214	.034***	.088	.041*
言語的攻撃性尺度	-.173	.044***	-.103	.048*	.294	.088**	.327	.091***	.226	.100*	.306	.107**
憂き晴らしモデル												
生活満足度(経済的状況)	-.103	.045*	-.062	.050	.042	.090	.030	.090	.026	.102	-.011	.105
ストレス認知頻度	.076	.066	.045	.072	.044	.132	.056	.143	-.016	.149	-.045	.168
サイバークスケードモデル												
社会的寛容性尺度	-.011	.023	-.057	.026*	-.014	.046	-.066	.049	-.051	.051	-.136	.057*
社会的制裁モデル												
社会考慮尺度												
社会考慮尺度	.222	.078**	.068	.085	-.052	.153	-.107	.162	-.093	.174	-.208	.186
社会認識尺度												
規範的社会認識尺度	.100	.052+	.033	.056	-.097	.097	-.112	.098	-.174	.108	-.251	.112*
共生的社会認識尺度	.009	.095	.021	.102	-.191	.182	-.160	.188	-.115	.206	-.023	.217
炎上情報接触頻度												
テレビ			.102	.111			.310	.218			.373	.252
ネットニュース			.759	.111***			-.568	.246*			-.324	.293
Twitter・同まとめ			.148	.122			.428	.225+			.484	.258+
2ちゃんねる・同まとめ			.353	.118**			.689	.215**			.798	.247**
定数	-.879	.659	-2.424	.741**	-1.943	1.251	-2.764	1.320*	.157	1.363	-1.011	1.484
R2乗(Cox & Snell)	.055		.246		.095		.023		.099		.138	
R2乗(Nagelkerke)	.077		.333		.252		.109		.301		.421	
該当者数	355		355		71		71		56		56	
N	1119		1119		1119		1119		1119		1119	

+: p < 0.1 *: p < 0.05 **: p < 0.01 ***: p < 0.001

3.2.2 炎上関連行動経験者はどのような人々か

「検索」についての分析では、言語的攻撃性が検索経験の有無に対しては負の効果を持っていた。このことから、炎上に興味を持っても、言語的攻撃性が低い人々は、炎上について投稿したり拡散したりしにくいと考えられる。また、炎上に関する情報に接触しているメディアに関しては、ネットニュースと2ちゃんねる・2ちゃんねるまとめサイトでの炎上情報接触頻度が正の効果を持っていた。

「拡散」経験の有無については、拡散したことはあるが投稿したことがない者が29名のみだったため、効果がでにくかったと考えられる。モデル1・2を通じて5%有意で効果があったのは、正の効果がある言語的攻撃性のみだった。投稿経験の有無についても言語的攻撃性が正の効果を持っており、炎上に興味を持っても、拡散や投稿をしない者と、拡散や投稿をする者との違いは、言語的攻撃性にあると考えられる。

「投稿」経験の有無に対しては、規範的社会認識傾向に負の効果、言語的攻撃性に正の効果があった。また、モデル2では、上記2つの尺度に加えて、社会的寛容性に負の効果があった。投稿経験者は、そうでない人々よりも(1)言い争いになる可能性があっても自分の意見を主張しようとする言語的攻撃性が高い一方、炎上を見聞きしている頻度に関する変数を投入したモデル2では(2)自分と異なる意見を受け入れたがらない傾向があり、(3)規範意識が低いという特徴を持つ可能性がある。

解釈が難しいのは、モデル2で投稿経験者はそうでない者よりも規範意識が低いという結果が出たことである。Rost et al. (2016)などの先行研究で、炎上は社会的制裁としての機能を持っていると考えられている。そこから炎上参加者は規範意識が高いことが推測されるのに対して、炎上に関して意見を書き込む者は、そうでない者よりも社会規範を重視しない人々である可能性があるという結果となった。

だが、吉野ほか(2018)で確認したように、炎上についての投稿には、炎上した者に対する批判だけでなく、ネタ化した投稿や多様な投稿が含まれている。そのため、炎上について投稿することはただちに社会的制裁に参加するものではないと言える。加えて、炎上が頻発することによって社会に悪影響が出ているという認識はここ近年高まっており、ACジャパン(2017)のような啓発キャンペーンも行われている。炎上に参加すべきではないという規範がある程度広がりつつあるのなら、投稿経験者は規範意識が低いからこそ炎上に関して自由な意見を書き込んでいるのかもしれない。

また、炎上情報接触頻度については、Twitterと2ちゃんねるでの炎上情報接触頻度が正の効果を持っていた。これは炎上についての投稿が盛り上が

っているところを見ることが、投稿を促していると解釈できる。

興味深いのは、検索・拡散についての分析については、モデル1・2ともに性差に関して効果がなかったのに対して、投稿についての分析ではモデル1・2ともに男性であると投稿しやすくなるという結果が出たことである。女性も炎上に興味を持つが、投稿は男性ほどうしないということになる。今回の分析では、言語的攻撃性の高さが炎上に関する拡散・投稿に影響するという結果になったが、言語的攻撃性とは別に、性差と関連するなんらかの属性が、炎上について投稿するかしないかに影響している可能性がある。

4 研究2：批判経験者についての仮説の検討

4.1 調査概要

仮説2を検証するため、株式会社ジャストシステムの「FastAsk」で、スクリーニングを伴うウェブモニタ調査を行った。調査期間は、2016年6月24日から7月7日である。

60代以上では炎上に関するコメント経験率が低いことから、スクリーニング調査は20代から50代までを対象として、各年代・性別ごとに2500名計20000名を目標として配信した。初回の配信では20代男女の回答が少なかったことから追加配信を行い、計22599名の回答を得た。

本調査はスクリーニング調査の回答者から、「インターネット上の不特定多数が閲覧できる場所に炎上事件についてコメントを書き込んだ」ことがあると回答した者に対して、20代・30代・40代計200名ずつ、50代100名計600名を目標として配信し、728名の回答を得た。研究1と同様に反転項目を含む2つの心理尺度設問（計10問）で同一の選択肢を選んだ者180名と、スクリーニング調査と本調査で回答が矛盾している者90名を除外し、453名を分析の対象とした（表9）。

表9 回答者の性別と年代 (n=453)

	20代	30代	40代	50代	合計
男性	85	83	91	35	291
女性	53	45	35	29	162
合計	135	128	126	64	453

表10は回答者の年代別主要CGM利用率である。ウェブモニタを対象とした研究1の年代別CGM利用率(表2)と比べて概して利用率が高い。研究1では全体のCGM利用率がTwitterは32.3%、2ちゃんねるは21.2%だが、炎上事例に関連した投稿経験者を対象とした研究2ではTwitterで68.7%、2ちゃんねるで40.4%となっている。

表10 年代別主要CGM利用率 (n=453)

	20代	30代	40代	50代	全体
LINE	119 88.1%	107 83.6%	87 69.0%	36 56.3%	349 77.0%
Twitter	102 75.6%	92 71.9%	82 65.1%	35 54.7%	311 68.7%
Facebook	72 53.3%	74 57.8%	73 57.9%	35 54.7%	254 56.1%
2ちゃんねる	53 39.3%	55 43.0%	52 41.3%	23 35.9%	183 40.4%
ネットニュースのコメント欄	38 28.1%	57 44.5%	51 40.5%	29 45.3%	175 38.6%
該当者数	135 100.0%	128 100.0%	126 100.0%	64 100.0%	453 100.0%

表11は、炎上に対する態度を問うた設問を、批判的投稿経験者と批判的投稿は行っていない炎上に関する投稿経験者に分けて集計した結果である。興味深いのは、批判的投稿経験者の方が、「炎上には社会正義としての意味がある」という設問に肯定的に答える一方、「炎上してもたいして影響はない」という設問にも肯定的に答えている傾向があることである。批判的投稿経験者の方が炎上した者を批判しても意味がないと考えていることになる。ただし、批判的投稿経験者であっても、批判した動機によって、炎上への態度が異なる可能性がある。4.3で、批判動機のタイプによって、この設問の

回答の傾向がどう異なるかを検討したい。

表 11 炎上関連投稿経験者の炎上に対する態度 (n=453)

注) 太字の部分は調整済み残差が 1.96 以上のセルを示す。

		とても そう思う	ややそう 思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	まったく 思わない	計
炎上するのは常識がないからだ	批判的投稿経験者	60 20.8%	104 36.1%	64 22.2%	43 14.9%	17 5.9%	288 100.0%
	批判的投稿経験のない投稿経験者	24 14.5%	54 32.7%	65 39.4%	19 11.5%	3 1.8%	165 100.0%
	計	84 18.5%	158 34.9%	129 28.5%	62 13.7%	20 4.4%	453 100.0%
炎上で誰かを叩いても、罰せられることはない	批判的投稿経験者	34 11.8%	68 23.6%	104 36.1%	60 20.8%	22 7.6%	288 100.0%
	批判的投稿経験のない投稿経験者	10 6.1%	21 12.7%	69 41.8%	49 29.7%	16 9.7%	165 100.0%
	計	44 9.7%	89 19.6%	173 38.2%	109 24.1%	38 8.4%	453 100.0%
炎上には、社会正義としての意味がある	批判的投稿経験者	30 10.4%	91 31.6%	96 33.3%	50 17.4%	21 7.3%	288 100.0%
	批判的投稿経験のない投稿経験者	8 4.8%	28 17.0%	62 37.6%	42 25.5%	25 15.2%	165 100.0%
	計	38 8.4%	119 26.3%	158 34.9%	92 20.3%	46 10.2%	453 100.0%
炎上しても、たいして影響はない	批判的投稿経験者	20 6.9%	65 22.6%	99 34.4%	74 25.7%	30 10.4%	288 100.0%
	批判的投稿経験のない投稿経験者	5 3.0%	23 13.9%	57 34.5%	49 29.7%	31 18.8%	165 100.0%
	計	25 5.5%	88 19.4%	156 34.4%	123 27.2%	61 13.5%	453 100.0%
ネット上で誰かが叩かれるのを見るのは面白い	批判的投稿経験者	22 7.6%	64 22.2%	100 34.7%	75 26.0%	27 9.4%	288 100.0%
	批判的投稿経験のない投稿経験者	6 3.6%	29 17.6%	65 39.4%	37 22.4%	28 17.0%	165 100.0%
	計	28 6.2%	93 20.5%	165 36.4%	112 24.7%	55 12.1%	453 100.0%

2 仮説 2：炎上した者に対する批判的投稿経験者に関する検討

4.2.1 従属変数

炎上に関する投稿の内容は、批判だけでなく中立的な意見、炎上の対象に直接抗議するもの、批判への反論などさまざまなものがありえる。炎上関連行動と合わせて、内容別について頻度を訊ねた結果が表 12 である。批判経

験者は、回答者のうち 63.6%にあたる 288 名だった。批判経験がある者についてダミー変数を作成し、従属変数として投入した。

表 12 投稿経験者の炎上関連行動頻度 (n=453)

	よくする	時々する	たまにする	1,2 回した	したことがない	合計
検索	75(16.6%)	109(24.1%)	182(40.2%)	57(12.6%)	30(6.6%)	453(100.0%)
拡散	43(9.5%)	72(15.9%)	103(22.7%)	58(12.8%)	177(39.1%)	453(100.0%)
批判	40(8.8%)	68(15.0%)	111(24.5%)	69(15.2%)	165(36.4%)	453(100.0%)
直接抗議	37(8.2%)	52(11.5%)	81(17.9%)	41(9.1%)	242(53.4%)	453(100.0%)
批判への反論	37(8.2%)	52(11.5%)	93(20.5%)	76(16.8%)	195(43.0%)	453(100.0%)
中立的書き込み	40(8.8%)	77(17.0%)	127(28.0%)	72(15.9%)	137(30.2%)	453(100.0%)

4.2.2 独立変数

独立変数としては、研究 1 と同じく、心理尺度（社会的寛容性・言語的攻

表 13 独立変数に用いた心理尺度設問（研究 2）

心理尺度名	下位尺度	設問（回答は特記があるもの以外 5 件法）
Buss-Perry 攻撃性尺度 (安藤他,1999)	言語的攻撃性	意見が対立したときは、議論しないと気がすまない／誰かに不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきり言う 計 2 問／ Pearson の相関係数は.467** Cronbach の α 係数は.636
社会的寛容性 (小林・池田,2008)		政治や社会のあり方について、次の(1)～(4)の人と意見が食い違う場合、あなたはどのように思いますか。(1) 家族(2) 親しい友人(3) 同僚・同級生(4) ソーシャルメディアでつながっている人／回答は、「1.意見は違ってもよい」から「4.意見は同じ方がよい」の 4 件法で訊ね、回答を反転した 計 4 問／ Cronbach の α 係数は.849
社会考慮尺度 (吉田他,1999)	社会考慮尺度	社会の中で、自分はどのように行動すべきなのか考えることがある ／社会全体がどのような方向に動いているかということに関心がある 計 2 問／ Pearson の相関係数は.557** Cronbach の α 係数は.715
	規範的社会認識 尺度	社会を住みよくするためには、法律や規則をもっと厳しくすべきだ／規則や法律を破る人は、社会人としての資格がない 計 2 問／ Pearson の相関係数は.428** Cronbach の α 係数は.598
	共生的社会認識 尺度	ひとりひとりの人間が、他人に対して配慮すれば社会はよくなる／世の中の人は、社会全体が暮らしやすくなるように協力すべきだ 計 2 問／ Pearson の相関係数は.633** Cronbach の α 係数は.775

** は 1%水準で有意。太字は追加した設問。

撃性・社会考慮尺度)の回答を投入した(表13)。心理尺度は研究1と同じものだが、設問を一部追加している。各尺度は信頼性の検定を行った上で合算値を投入した。

モデル2では、メディア別の炎上情報接触頻度も投入した(表14)。批判的投稿経験者と非経験者を分けたクロス集計の結果では、ネットニュースでの認知頻度にはあまり差がないが、テレビ・Twitter・2ちゃんねるの認知頻度では批判的投稿経験者の方が高い傾向がある。

表14 メディア別炎上関連情報認知頻度

注) 太字の部分は調整済み残差が1.96以上のセルを示す。

		よく見る	時々見る	たまに見る	1,2回見たことがある	見たことがない	覚えていない	合計
炎上認知頻度：テレビ	批判的投稿経験者	67 23.3%	68 23.6%	95 33.0%	34 11.8%	14 4.9%	10 3.5%	288 100.0%
	批判的投稿経験のない投稿経験者	17 10.3%	30 18.2%	70 42.4%	26 15.8%	12 7.3%	10 6.1%	165 100.0%
	計	84 18.5%	98 21.6%	165 36.4%	60 13.2%	26 5.7%	20 4.4%	453 100.0%
炎上認知頻度：ネットニュース	批判的投稿経験者	87 30.2%	92 31.9%	67 23.3%	28 9.7%	9 3.1%	5 1.7%	288 100.0%
	批判的投稿経験のない投稿経験者	54 32.7%	50 30.3%	44 26.7%	7 4.2%	6 3.6%	4 2.4%	165 100.0%
	計	141 31.1%	142 31.3%	111 24.5%	35 7.7%	15 3.3%	9 2.0%	453 100.0%
炎上認知頻度：Twitter	批判的投稿経験者	60 20.8%	67 23.3%	85 29.5%	32 11.1%	34 11.8%	10 3.5%	288 100.0%
	批判的投稿経験のない投稿経験者	20 12.1%	20 12.1%	42 25.5%	25 15.2%	44 26.7%	14 8.5%	165 100.0%
	計	80 17.7%	87 19.2%	127 28.0%	57 12.6%	78 17.2%	24 5.3%	453 100.0%
炎上認知頻度：2ちゃんねる	批判的投稿経験者	55 19.1%	49 17.0%	86 29.9%	40 13.9%	46 16.0%	12 4.2%	288 100.0%
	批判的投稿経験のない投稿経験者	18 10.9%	19 11.5%	35 21.2%	26 15.8%	58 35.2%	9 5.5%	165 100.0%
	計	73 16.1%	68 15.0%	121 26.7%	66 14.6%	104 23.0%	21 4.6%	453 100.0%

4.2.3 統制変数

統制変数として、性別、年齢、学歴(大卒以上ダミー)、世帯年収(300万円未満ダミー／900万円以上ダミー)、主要CGM(LINE・Twitter・

Facebook・2ちゃんねる)の閲覧頻度の合算値を投入した。

4.3 結果と仮説の検討

4.3.1 結果

表15が、炎上に関する投稿経験者を対象とし、批判的投稿経験の有無を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析の結果である。

表15 炎上関連投稿経験者における批判的投稿経験の有無を従属変数とする
二項ロジスティック回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3	
	B	SE	B	SE	B	SE
性別(男性=1 女性=2)	-.262	.222	-.328	.237	-.370	.250
年齢	-.047	.010***	-.043	.011***	-.043	.012***
大卒以上ダミー	-.128	.221	-.117	.244	-.195	.254
世帯年収300万未満ダミー	.701	.294*	.954	.314**	.889	.326**
世帯年収900万円以上ダミー	.701	.302*	.824	.331*	.805	.344*
CGM閲覧頻度	.085	.024***	.117	.026***	.067	.030*
言語的攻撃性尺度			.032	.063	-.003	.067
憂さ晴らしモデル						
生活満足度(経済的状況)			.028	.074	-.005	.078
ストレス認知頻度			-.151	.113	-.157	.119
サイバーカスケードモデル						
社会的寛容性尺度			-.124	.041**	-.122	.042**
社会的制裁モデル						
社会考慮尺度						
社会考慮尺度			-.002	.072	.043	.077
社会認識尺度						
規範的社会認識尺度			.195	.077*	.210	.080**
共生的社会認識尺度			-.302	.081***	-.317	.086***
炎上情報接触頻度						
テレビ					.309	.118**
ネットニュース					-.314	.135*
Twitter・同まとめ					.171	.103+
2ちゃんねる・同まとめ					.279	.100**
定数	1.785	.588**	3.985	1.058***	3.496	1.134**
R2乗(Cox と Snell)	.110		.193		.238	
R2乗(Nagelkerke)	.151		.264		.326	
該当者数	294		294		294	
N	453		453		453	

+ ; p < 0,1 * ; p < 0.05 ** ; p < 0.01 *** ; p < 0.001

「仮説2-1: 批判的な投稿経験者は、批判的な投稿をしたことがない投

稿経験者と比べて、経済的状況への満足度が低い（憂さ晴らしモデル）」は、経済的状況に関する生活満足度に効果がなく、支持されなかった。また、「仮説 2 - 2：批判的な投稿経験者は、批判的な投稿をしたことがない投稿経験者と比べて、ストレスが溜まっている傾向がある（憂さ晴らしモデル）」は、ストレスの認知頻度に効果がなく、支持されなかった。このことから、投稿経験者を対象として、批判経験者と未経験者を比較した場合、批判経験者に憂さ晴らしモデルが当てはまるとはいえないという結果になった。

「仮説 2 - 3：批判的な投稿経験者は、批判的な投稿をしたことがない投稿経験者と比べて、社会的寛容性が低い傾向がある（サイバークスケードモデル）」は、モデル 2 と 3 で社会的寛容性が負の効果を持っていたことから支持された。投稿経験者の中で比較すると、批判的な投稿経験者は多様な意見を受け入れるよりも、周囲の意見と同じ意見を持つことを好む可能性がある。

「仮説 2 - 4：批判的な投稿経験者は、批判的な投稿をしたことがない投稿経験者と比べて、社会考慮傾向が高い傾向がある（社会的制裁モデル）」は、社会考慮尺度の下位尺度である規範的社会認識尺度に正の効果があることから部分的に支持された。ただし、下位尺度としての社会考慮尺度については効果がなく、共生的社会認識尺度については負の効果があった。批判的な投稿経験者は、投稿者の中では、規範意識が高い一方、人々の互助によって社会が成り立っているとは考えていない傾向があるということになる。

4.3.2 批判的投稿経験者はどのような人々なのか

仮説 2 の検討からは、投稿経験者の中では、批判的な投稿経験者は、規範意識が強い一方、社会的寛容性が低い傾向があるという結果となった。規範意識の強さは、社会的規範に反した行動への批判に結びつくと考えられる。サイバークスケードモデルと社会的制裁モデルの 2 つのモデルが、一定の妥当性を持つ可能性を示唆する結果と言える。

一方、憂さ晴らしモデルについては、経済的状況への満足度にもストレス蓄積の自覚頻度にも効果はなく、少なくとも投稿経験者の中で比較する限り、批判的投稿の有無を憂さ晴らしモデルで説明するのは難しいと考えられる。

さらに、炎上認知頻度を独立変数として投入したモデル2では、批判経験の有無に対して、テレビとTwitter、2ちゃんねるでの炎上認知頻度に正の効果、ネットニュースに負の効果があった。炎上が盛り上がる場となりやすいTwitterと2ちゃんねるに正の効果があることは、批判経験者は、他のCGMユーザーの批判的な投稿を見聞きした時に同調して批判しやすくなる人々と考えられる。吉野（2015）の分析では、テレビのニュース番組での認知が炎上した者を非難する態度を強め、ネットニュースでの認知が炎上は社会正義の一環ではないという評価に結びついていたことから、炎上に対する態度の違いが影響している可能性がある。

また、規範的社会認識尺度が正の効果を持つ一方、共生的社会認識尺度が負の効果を持っているということは興味深い。共生的社会認識尺度は、互いの配慮や互助によって社会をよりよくできるという認識の強さを測るものである。投稿経験者に対象を絞った限定的な分析の結果であるが、規範的社会認識傾向が高く、共生的社会認識傾向が低いということは、批判経験者は自発的な助け合いよりも、規範に反した者を制裁することによって社会が維持されていると考えている人々なのかもしれない。

4.4 仮説3の検討：炎上した者に対する批判的な投稿の動機に関する検討

4.4.1 従属変数

炎上の対象を批判した経験がある者に対して、批判した理由を6つ挙げ、5件法で訊ねた（表16）。6つの設問は、BIGLOBEの「ネット炎上に関する意識調査」を参考に作成した（BIGLOBE 2016¹⁰）。「あてはまる」「どちらか

10 この調査は、15歳～82歳の男女1288名に対して2016年5月に行われたもので、ネット炎上に参加するつもりで投稿した経験があると答えた者76名に対し、炎上に参加した理由を複数選択方式で訊ねている。回答者が多い順に、「不正や不公平と感じたから」57%、「親切心から忠告してあげたいと思ったから」38%、「誰かが投稿した批判の内容に共感したから」37%、「自分・身内や他人を批判から守りたいと思ったから」22%、「話題となった芸能人・有名人の投稿や行動を見るとイライラするから」22%、「話題となった企業が腹立たしいから」21%、「ネット上でお祭り騒ぎになっていたので参加したくなったから」17%、「匿名で誰かを批判して、スカッとしたかったから」9%となっている（BIGLOBE 2016）。

と言うとあてはまる」を選択した批判経験者の比率がもっとも大きかったのが「他人の批判に共感した」の50.0%、次いで「相手が間違ったことをした」の49.7%となっている。一方、「誰かを叩いてスカッとしたかった」は22.8%でもっとも少なかった。ただし、複数の炎上事例で批判している者では、事例によって批判した動機が異なっている可能性がある。

表 16 批判経験者が「炎上」の対象を批判した理由 (n=294)

	あてはまる	どちらかと言う とあてはまる	どちらとも 言えない	どちらかと言うと あてはまらない	あてはまら ない	合計
誰かを叩いてスカッ としたかったから	17(5.8%)	50(17.0%)	91(31.0%)	68(23.1%)	68(23.1%)	294(100.0%)
盛り上がっていた から	24(8.2%)	87(29.6%)	93(31.6%)	51(17.3%)	39(13.3%)	294(100.0%)
もともと相手が嫌い だったから	30(10.2%)	72(24.5%)	102(34.7%)	53(18.0%)	37(12.6%)	294(100.0%)
相手が間違ったこと をしたから	55(18.7%)	91(31.0%)	67(22.8%)	57(19.4%)	24(8.2%)	294(100.0%)
他人の批判に共感し たから	40(13.6%)	107(36.4%)	79(26.9%)	46(15.6%)	22(7.5%)	294(100.0%)
相手に忠告したかっ たから	29(9.9%)	96(32.7%)	99(33.7%)	46(15.6%)	24(8.2%)	294(100.0%)

4.4.2 批判理由の因子分析結果

表 16 の炎上した者を批判した動機に関する設問の結果に対して因子分析を行ったのが表 17 である。第一因子は因子負荷量が高い順に、「誰かを叩いてスカッとしたかったから」「盛り上がっていたから」「もともと相手が嫌いだったから」で構成され、先に検討した炎上の「祭り」としての側面に結びつくと考えられる。第二因子は、「相手が間違ったことをしたから」「他人の批判に共感したから」「相手に忠告したかったから」で構成され、社会的制裁としての側面に結びつくと考えられる。

表 17 「炎上対象を批判した理由」の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転後）

	第 1 因子 ([祭り] 型)	第 2 因子 ([制裁] 型)
誰かを叩いてスカッとしたかったから	.879	-.200
盛り上がっていたから	.713	.074
もともと相手が嫌いだったから	.665	.139
相手が間違っただけをしたから	-.226	.880
他人の批判に共感したから	.330	.549
相手に忠告しなかったから	.198	.511
説明された分散の%	42.447	13.759
因子間相関		.468

各因子得点と年齢・性別の間には有意な相関はなかった。各因子得点と炎上関連行動頻度の相関を見ると、いくつか有意な相関が見られた。「祭り」型因子得点では、「拡散」.156（1%水準有意）、「直接抗議」.220（1%水準有意）の有意な相関があり、「制裁」型は、「拡散」-.144（5%有意）、「直接抗議」-.209（1%有意）・「批判への反論」-.164（5%有意）の有意な相関があった。「祭り」型動機が強いと、「拡散」や「直接抗議」を行う頻度が高くなるが、「制裁」型では逆に「拡散」「直接抗議」を行う頻度が低くなり、さらに「制裁」型は「批判への反論」を行わない傾向があると示唆される。

表 18 は、批判理由因子得点と炎上への態度を問うた設問の回答との相関である。設問はすべて、1 を「まったく思わない」、5 を「とてもそう思う」とする 5 件法で訊ねた。相関係数が 0.3 以上の組み合わせは、「祭り」型因子得点では「炎上で誰かを叩いても罰せられることはない」「炎上しても、たいして影響はない」「ネット上で誰かが叩かれているのを見るのは面白い」、 「制裁」型因子得点では、「炎上するのは常識がないからだ」「炎上には社会正義としての意味がある」となった。

表 18 批判理由因子得点と、炎上への態度の相関 (n=294)

	「祭り」 型	「制裁」 型	炎上する のは常識 がないか らだ	炎上で誰 かを叩い ても、罰 せられるこ とはない	炎上には、社会 正義とし ての意味 がある	炎上し ても、 たいし て影響 はない
批判理由第一因子：「祭り」型	—	—	—	—	—	—
批判理由第二因子：「制裁」型	.547**	—	—	—	—	—
炎上するのは常識がないからだ	.153**	.466**	—	—	—	—
炎上で誰かを叩いても、 罰せられることはない	.330**	.249**	.244**	—	—	—
炎上には、社会正義としての意味 がある	.266**	.304**	.390**	.445**	—	—
炎上しても、たいして影響はない	.307**	.099	.190**	.419**	.460**	—
ネット上で誰かが叩かれるの を見るのは面白い	.412**	.218**	.328**	.327**	.337**	.346**

*; $p < 0.05$ **; $p < 0.01$ (いずれも両側)

「祭り」型動機が強い者には、炎上に参加した者・炎上した者双方への影響を楽観視していると同時に、ネットのバッシングを面白いと捉えている傾向があり、炎上を面白がって参加していると考えられる。一方、「制裁」型動機が強い者には、炎上した者を常識がないと非難し、炎上は社会正義だと肯定する態度が強い傾向があり、より真剣に炎上した者を批判していると考えられる。

以上のことから、「祭り」型動機の強弱、「制裁」型動機の強弱で、炎上に関連した行動の頻度や炎上に対する態度が異なると考えられる。これら2つの因子得点を従属変数として、重回帰分析を行った。

4.4.3 独立変数

独立変数は、仮説2の検討と同様に、社会的寛容性4問（小林・池田2008）の合算値、Buss-Perry 攻撃性尺度（安藤ほか1999）のうち言語的攻撃性2問の合算値、社会考慮尺度（吉田ほか1999）を投入した（表14）。また、モデル2ではメディア別の炎上認知頻度の回答を投入した。

4.4.4 統制変数

年齢、性別、学歴（大卒以上ダミー）と世帯年収（300万円未満ダミー／900万円以上ダミー）の回答を投入した。

4.4.5 結果と仮説の検討

「炎上を批判した理由」の因子得点を従属変数とした重回帰分析の結果が、表 19 である。

表 19 批判理由の因子得点を従属変数とした重回帰分析

	第一因子 ([「祭り」型])		第二因子 ([「制裁」型])	
	モデル 1	モデル 2	モデル 1	モデル 2
	β	β	β	β
性別(男性=1 女性=2)	.027	.036	-.004	-.002
年齢	-.038	-.001**	.024	.018 ***
大卒以上ダミー	-.007	-.024	-.051	-.045
世帯年収300万未満ダミー	-.008	-.093	.032	.038 **
世帯年収900万円以上ダミー	.079	.161	.048	.056 *
CGM閲覧頻度	.023	.008*	.032	.101 *
言語的攻撃性尺度	.082	.029*	.002	.030
憂さ晴らしモデル				
生活満足度(経済的状況)	.104	.052*	-.135*	-.101
ストレス認知頻度	.110+	.107+	.137*	.148
サイバースカールドモデル				
社会的寛容性尺度	-.190**	-.057*	-.095	-.093 **
社会的制裁モデル				
社会考慮尺度				
社会考慮尺度	-.091	-.034*	.226**	.194
社会認識尺度				
規範的社会認識尺度	.189**	.098*	.231***	.224 **
共生的社会認識尺度	-.107	-.035*	.064	.072 ***
炎上情報接触頻度				
テレビ		.010+		-.131 **
ネットニュース		-.146+		.071 *
Twitter・同まとめ		.094+		-.078 +
2ちゃんねる・同まとめ		-.051*		-.059 **
定数	-.177	-.033	-1.612***	-1.409 **
R2乗(調整済み)	.121	.143	.215	.234
N	294	294	294	294

+; p < 0.1 *; p < 0.05 **; p < 0.01 ***; p < 0.001

「仮説 3 - 1：炎上した者を批判した動機には、少なくとも『祭り』型と『制裁』型の 2 つの次元がある」については、表 17 の因子分析の結果が、「祭り」型／「制裁」型と解釈できるものであったことから支持された。

「仮説 3 - 2：『祭り』型動機が強い批判経験者は、そうでない批判経験者と比べて、社会的寛容性が低い」については、重回帰分析（表 19）の結果、

「祭り」型動機に対して、社会的寛容性に負の効果があり、「制裁」型動機に対しては効果がなかったことから支持された。

「仮説 3 - 3:『制裁』型動機が強い批判経験者は、そうでない批判経験者と比べて、社会考慮傾向が強い」については、重回帰分析（表 19）の結果、「制裁」型動機に対して、社会考慮尺度と規範的認識尺度に正の効果があったことから支持された。ただし、「祭り」型動機に対しても、規範的認識尺度に正の効果があった。

4.5 「祭り」型動機と「制裁」型動機による批判経験者の類型化

4.5.1 批判動機の強弱によって分けた 4 群の特徴

「祭り」型動機の因子得点が 1 以下の者を「祭り」型動機低群、そうでない者を高群、「制裁」型動機の因子得点が 1 以下の者を「制裁」型動機低群、そうでない者を高群とし、組み合わせて 4 類型（(A)「祭り」型高・「制裁」型高群／(B)「祭り」型高・「制裁」型低群／(C)「祭り」型高・「制裁」型高低群／(D)「祭り」型低・「制裁」型高低群）とし、炎上関連行動の頻

表 20 批判動機群別に見た炎上関連行動頻度の平均値と標準偏差

	(A) 祭り高・ 制裁高	(B) 祭り高・ 制裁低	(C) 祭り低・ 制裁高	(D) 祭り低・ 制裁低	F	批判経験者 全体
検索	3.36 1.210	3.26 1.047	3.57 .931	3.57 .909	1.461	3.44 1.055
拡散	3.13 1.376 c	3.20 1.062 b	2.29 1.140 a,b,c	3.30 1.182 a	8.778***	3.03 1.269
批判	3.25 1.149	3.10 .995	2.95 .818 a	3.51 .941 a	3.773***	3.23 1.021
直接抗議	2.77 1.420 a	2.98 1.072 b	1.79 1.171 a,b,c	3.14 1.354 c	13.421***	2.72 1.371
中立的投稿	3.23 1.254	3.10 .870	2.89 1.107	3.39 1.102	2.319+	3.18 1.123
該当者数	100	61	56	77		294

上段が平均値、下段が標準偏差。表中a,b,c,dは単純主効果の結果を示し、平均値が高いほど該当項目の頻度が高い。

度・炎上への態度・炎上以外の投稿内容の頻度を従属変数として分散分析を行った（表 20・表 21・表 22）。

炎上関連行動の頻度（表 20）については、拡散・批判・直接抗議で（C）群の平均値が他の群よりも有意に低かった。一方、（D）群の行動頻度がすべての項目でもっとも高く、「祭り」型・「制裁」型動機がともに弱い者がもっとも活発に炎上関連行動を行っているという結果になった。

炎上への態度（表 21）については、「炎上するのは常識がないからだ」という炎上した者を非難する態度と、「炎上には、社会正義としての意味がある」という炎上を肯定する態度が（A）群と（C）群で、（D）群よりも有意に高かった。炎上を面白いがる態度（「ネット上で誰かが叩かれるのを見るのは面白い」）については、（C）群の平均値は（A）群や（B）群より有意に低い。これらをあわせると、（C）群は「祭り」型動機が高い群とくらべて、炎上した者に少なからぬ影響が出ると認知しつつ、批判を正義だと正当化している傾向があると推測できる。

表 21 批判動機群別に見た炎上への態度に関する回答の平均値と標準偏差

	(A) 祭り高・ 制裁高	(B) 祭り高・ 制裁低	(C) 祭り低・ 制裁高	(D) 祭り低・ 制裁低	<i>F</i>	批判経験者 全体
炎上するのは 常識がないか らだ	3.93 .956 a,b	2.98 1.025 a,c	4.02 .924 c,d	2.99 1.230 b,d	21.460***	3.50 1.147
炎上には、社 会正義として の意味がある	3.49 1.105 a	3.15 .853	3.43 1.093 b	2.70 1.014 a,b	9.605***	3.20 1.076
炎上しても、 たいして影響 はない	3.23 1.162 a,b	3.02 .826	2.60 1.139 a	2.58 .991 b	7.289***	2.90 1.085
ネット上で誰か が叩かれるの を見るのは面白 い	3.42 1.046 a,b,c	2.97 .930 a,d	2.68 .936 b	2.48 1.059 c,d	14.207***	2.94 1.072
該当者数	100	61	56	77		294

上段が平均値、下段が標準偏差。表中a,b,c,dは単純主効果の結果を示し、平均値が高いほど該当項目の頻度が高い。

普段の投稿内容（表 22）を見ると、（D）群の平均値が、「身の回りのこと」について（A）群よりも、「身の回りの人への批判」について（C）群よ

りも、「商品やサービスへの不満」について（A）群・（C）群よりも有意に高かった。（D）群は炎上した者を批判する動機が弱いにもかかわらず、4群の中で活発に拡散・批判的な投稿などを行っているが（表20）、これは普段から活発にネット上で投稿しており、その一環として話題になっている炎上についても、深い動機はなく投稿している可能性がある。

表 22 批判動機群別に見た普段の投稿内容頻度の平均値と標準偏差

	(A) 祭り高・ 制裁高	(B) 祭り高・ 制裁低	(C) 祭り低・ 制裁高	(D) 祭り低・ 制裁低	F	批判経験者 全体
身の回りのこと	2.64 .959 a	2.85 .749	2.68 .956	3.03 .858 a	3.127*	2.79 .902
身の回りの人 への批判	2.26 1.125	2.36 .876	1.91 .837 a	2.55 1.033 a	4.477**	2.29 1.019
商品やサービ スへの不満	2.42 .955 b	2.48 .698	2.21 .706 a	2.77 .999 a,b	4.608**	2.48 .893
他の人のネット での発言に対 する批判	2.72 1.092 a	2.49 .960	2.23 .763 a	2.65 .943	3.357*	2.56 .982
該当者数	100	61	56	77		294

上段が平均値、下段が標準偏差。表中a,b,c,dは単純主効果の結果を示し、平均値が高いほど該当項目の頻度が高い。

4.5.2 「祭り」型動機が強い、または「制裁」型動機が強い批判経験者はどのような人々か

これらの結果から、炎上した者を批判するという行為に「祭り」型動機と「制裁」型動機が存在することが確認できた。では、「祭り」型動機が強い人々、「制裁」型動機が強い人々はどのような特徴を持つ可能性が高いのだろうか。

「祭り」型動機については、重回帰分析の結果、社会的寛容性が負の効果、規範的認識尺度が正の効果を持っていた。炎上に関連して批判的な投稿をした経験がある人々の中では、社会を維持するためには規範を守るべきであり、守らない者は排除すべきだという考えが強く、同時に多様な意見を受け入れるよりも、周囲と同じ意見で盛り上がることを好む人々であると考えられる。

炎上に対する態度との相関からは炎上の影響を軽視する傾向があると示唆される（表 18）。

また、炎上関連情報の認知頻度については、ネットニュースと Twitter での炎上関連情報の認知頻度が正の効果を持ち、Twitter での炎上参加の特徴である「拡散」と「直接的な抗議」の頻度と正の相関を持っていることから、Twitter やネットニュースを中心に、炎上について見聞きし、Twitter で炎上に参加している可能性がある。

「制裁」型動機については、重回帰分析で規範的認識尺度だけでなく社会考慮も正の効果を持っており、社会への関心の高さとルールは守るべきだという考えの強さが、炎上した者が社会規範から逸脱していると認識しやすくなり、規範を逸脱した者として批判する要因になっていると考えられる。相関分析の結果（表 21）からは、炎上した者を常識がないと非難する一方、炎上を社会正義の一種として肯定する態度が、「制裁」型動機が強い批判的投稿経験者に強いことが示唆される。

興味深いのは、「制裁」型動機に対するモデル 1 の分析で、「憂さ晴らし」モデルから想定される特徴である経済的状況に対する不満とストレスの蓄積が読み取れることである。炎上やネットでの攻撃的な投稿は、社会への不満の捌け口だという解釈は広く見られるものの、学術的な検討では、この解釈を直接支持する結果は報告されていなかった。

だが、今回の分析結果からは、「制裁」型動機が強い批判経験者は、同時に「憂さ晴らし」モデルから想定される人物像に近い特徴を持っていることが示唆された。投稿経験の有無を従属変数とした二項ロジスティック分析（表 8）や、投稿経験者の中で批判的投稿の有無を分析した二項ロジスティック分析（表 15）では、「憂さ晴らし」モデルから推測した変数が効果を持っておらず、投稿経験者全体または批判的な投稿経験者全体は「憂さ晴らし」モデルでは説明できないが、動機によって批判的な投稿経験者を分けた場合、「制裁」型の動機が強い者については「憂さ晴らし」モデルから説明できると考えられる。今回の分析では因果関係は特定できないが、経済的状況に対する不満やストレスの蓄積が、炎上した者への制裁への欲求を強めて

いる可能性がある。

川嶋・大渕・熊谷・浅井（2012）は、ミクロ公正感・マクロ公正感と社会的な不平等への抗議行動の関連を郵送法による調査（2009年2～3月、 $n=1398$ ）のデータから検討している。ミクロ公正感は、自分自身の処遇が公正であると評価しているかどうかを測定する尺度で、マクロ公正感とは社会システム全体が適正だと評価しているかどうかを測定する尺度である¹¹。社会的な不平等への抗議行動を規範的抗議行動（選挙での投票や市民運動への参加など）と反規範的抗議行動（社会のルールに従わない、一種のサボタージュ）に分けて従属変数とした重回帰分析の結果、ミクロ公正感は規範的抗議行動にも反規範的抗議行動にも負の効果があつたと報告している。つまりミクロ公正感が低い人、すなわち自分は公正に評価されていないと感じている人は、社会的な不平等に対する規範的抗議行動や反規範的抗議行動を行う可能性が高くなる。

経済的状况に不満があるということは、自分は現状よりも高い収入に値するはずだと評価していることでもあり、川嶋ほか（2012）の言うミクロ公正感が低い状態と近いと考えられる。「制裁」型動機の強さに経済的状况への不満が効果を持つのは、自分は正当に評価されていないと感じている人は、社会的公正を求める傾向が強くなり、炎上した者を規範に背いた者として非難しやすくなるからかもしれない。

本研究では具体的な投稿内容との関連を検討できないが、「制裁」型動機が強い批判経験者は、社会の不正を糾すつもりで炎上に参加していると考えられるため、そうではない批判経験者よりも、炎上した者に対して厳しく強い批判をしている可能性がある。そのため、炎上に関する投稿の中での比率は低くても目に付きやすく、炎上に参加する典型的なタイプだと感受されやすいのかもしれない。そしてこのような動機からの炎上参加が「憂さ晴ら

11 ミクロ公正感は「私は、この社会の中で公正には扱われていない」（逆転）「私は、この社会の中で不公正な扱いを受けている」（逆転）の2項目、マクロ公正感は「現在の日本は、公正な社会とはいえない」（逆転）「現在の日本の社会状況は、公正とはいえない」（逆転）「現在の日本は、公正に運営されている」の3項目で測定されている（川嶋ほか2012）。

し」として経験的に解釈されがちなのは、彼らの批判を見聞きする多くの者にとっては、強すぎる批判がいだちをぶつけているようにしか見えないのかもしれない。

5 考察

本論文では、炎上への参加（批判的投稿）を説明するモデルとして、憂さ晴らしモデル・サイバースカッドモデル・社会的制裁モデルの3つを先行研究などの検討から整理した上で、2つのウェブモニタ調査のデータを元に、(1) ウェブモニタの中で、投稿経験者は非経験者と比べてどのような特徴を持つか（研究1）、(2) 投稿経験者の中で、批判的な投稿をしたことがある者は、批判的な投稿をしたことがない者とくらべてどのような特徴を持つか（研究2）、(3) 批判的な投稿をした者の動機は類型化できるのか、動機タイプによって個人特性は異なるのか（研究2）を検討した。以下、結果を振り返って考察を加えたい。

(1) 炎上関連投稿経験者は非経験者と比べてどのような特徴を持つか（研究1）

検索のみしたことがある者と検索・拡散・投稿のいずれもしたことがない者を比較すると、検索経験者は言語的攻撃性が低い一方、社会考慮傾向が高かった。言い争いになってもみずからの意見を主張することは好まないが、社会に対して関心を強く持っている人々と考えられる。

投稿経験者と投稿をしたことがない者を比較すると、投稿経験者は、言語的攻撃性が高く、社会的寛容性が低かった。一方、投稿経験者の規範的社会認識傾向は低いという結果となった。みずからの意見を主張することを好むが、多様な意見を受け入れるよりも、自分と似たような意見をもつ者と交流することを好み、また規範意識は低い傾向があると推測できる。

(2) 投稿経験者の中で、批判的な投稿をしたことがある者は、批判的な投稿をしたことがない者とくらべてどのような特徴を持つか（研究2）

炎上関連投稿経験者に対する批判的な投稿経験者の特徴は、社会的寛容性

が低く、規範的社会認識傾向が高い一方、共生的社会認識傾向が低いという結果になった。似た意見の持ち主と交流することを好み、規範意識は高いが、互助によって社会が支えられているとはあまり考えていない傾向があると思われる。

(3) 批判的な投稿をした者の動機は類型化できるのか、動機タイプによって個人特性は異なるのか（研究2）

因子分析の結果、批判的な投稿の動機は「祭り」型と「制裁」型に分かれた。批判的投稿経験者のうち、「祭り」型動機が強い者はサイバースケードモデルから想定したように社会的寛容性傾向が低く、「制裁」型動機が強い者は社会的制裁モデルから想定したように社会考慮傾向が高いという結果になった。

これらの結果から、サイバースケードモデルは「祭り」型動機が強い者、社会的制裁モデルは「制裁」型動機が強い者に当てはまっていると言える。さらに「制裁」型動機が強い批判的投稿者は憂さ晴らしモデルから想定される特徴（経済的状況への不満とストレスの自覚頻度の高さ）を持っていた。サイバースケードモデル・社会的制裁モデル・憂さ晴らしモデルのうちどれか一つが正しいわけではなく、3つがそれぞれ部分的に炎上参加者の動機や背景を説明していると考えられる。

以上の結果から、炎上について批判的な投稿する者は、一種の社会的な活動として炎上に参加しているのではないかと推測できる。

「はじめに」では、コンビニのアイスケースに入った画像がネットに投稿されたのに対して、投稿者ともコンビニとも無縁であり、利害関係もない人々が批判するのが奇妙だと例示した。本研究の結果からは、「祭り」型動機が強い批判者は、批判者同士で盛り上がるために批判し、「制裁」型動機が強い批判者は、炎上した者を規範に反する行動をとった者とみなし、社会規範を維持するために批判しているという説明になるだろう。

先に、炎上が過剰な制裁となっている事例があることを紹介した。このような炎上の害に焦点を当てると、炎上への参加は過剰に攻撃的な逸脱行動と

して捉えられやすくなる。だが、今回の調査結果からは、そのようなイメージにはあてはまらない理由から炎上参加者は行動しているのかもしれないという示唆が得られた。

もし、ごく少数の者が攻撃的な投稿を行っており、それが人々の関心を惹きつけないのなら、限られた社会的影響力しか持たないだろう。もし、数千から数万の人々が、攻撃的・批判的ではなく好意的な論調で話題にするだけなら、話題にされた者にネガティブな影響が降りかかることはないだろう。だが、炎上の場合、短期間に多くの人の耳目を惹きつけるために、攻撃的・批判的な投稿が少数派であっても、それらの投稿が社会的影響力を持ってしまうのが問題だと考えられる。ではどのような啓発や対応が望ましいのか、今後検討していきたい。

引用文献

- 安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子, 1999, 「日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性と信頼性の検討」『心理学研究』70 : 384-392.
- AC ジャパン, 2017, 「苦情殺到！桃太郎 (全国キャンペーン)」(2017 年 11 月 30 日取得, https://www.ad-c.or.jp/campaign/self_all/self_all_01.html).
- BIGLOBE, 2016, 「BIGLOBE が『ネット炎上に関する意識調査』を実施」, (2017 年 6 月 1 日取得, <http://enjoy.sso.biglobe.ne.jp/archives/flaming/>).
- 文化庁, 2017, 「平成 28 年度『国語に関する世論調査』結果の概要」, (2018 年 9 月 1 日取得, http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h28_chosa_kekka.pdf).
- キャリアコネニュース編集部, 2017, 「AC が『苦情殺到！桃太郎』の CM で炎上に苦言 専門家は『普通の人々がうっ憤を晴らそうとして起きる』と指摘」(2017 年 6 月 1 日取得, <https://news.careerconnection.jp/?p=37821>).
- 平井智尚, 2012, 「なぜウェブで炎上が発生するのか：日本のウェブ文化を手がかりとして」, 『情報通信学会誌』29 (4) : 61-71.
- 伊藤昌亮, 2014, 「血と血祭り 炎上の社会学」川上量生監修『ネットが生んだ文化』角

- 川学芸出版：173-208.
- 川嶋伸佳・大淵憲一・熊谷智博・浅井暢子，2012，「多元的公正感と抗議行動：社会不変信念、社会的効力感、変革コストの影響」『社会心理学研究』27（2）：63-74.
- 河島茂生，2014，「創発するネットコミュニケーション」西垣通・河島茂生・西川アサキ・大井奈美編『基礎情報学のヴァイアビリティ』東京大学出版会：75-96.
- 小林直樹，2011，『ソーシャルメディア炎上事件簿』日経 BP 社.
- 小林哲郎・池田謙一，2008，「PC によるメール利用が社会的寛容性に及ぼす効果——異質な他者とのコミュニケーションの媒介効果に注目して」『社会心理学研究』24（2）：120-130.
- 小峯隆生，2015，『「炎上」と「拡散」の考現学』，祥伝社.
- 三上俊治，2001，「インターネット時代の世論と政治」高木修監修・川上善郎編著『情報行動の社会心理学』北大路書房：128-140.
- 三浦麻子・小林哲朗，2015，「オンライン調査モニタの Satisfice に関する実験的研究」『社会心理学研究』31（1）：1-12.
- 中川淳一郎，2009，『ウェブはバカと暇人のもの』光文社.
- 日本経済新聞，2015 年 2 月 17 日夕刊，「ブログや短文サイト『悪意』投稿 4 人に 1 人若者、薄い倫理意識」，p.12.
- 荻上チキ，2007，『ウェブ炎上』筑摩書房.
- Rost, K., Stahel, L., and Frey B. S., 2016, "Digital Social Norm Enforcement: Online Firestorms in Social Media," PLoS ONE, 11（6）, (Retrieved June 1, 2017, <http://journals.plos.org/plosone/article?id=10.1371/journal.pone.0155923>) .
- 田中辰雄，2016a，「炎上加担動機の実証分析」2016 年社会情報学会（SSI）学会大会発表——2016b，「炎上攻撃者の特性と対策」『臨床精神医学』45（10）：1125-1236.
- 田中辰雄・山口真一，2016，『ネット炎上の研究』勁草書房.
- 田代光輝・服部哲，2013，『情報倫理』共立出版.
- 山口真一，2015，「実証分析による炎上の実態と炎上加担者属性の検証」『情報通信学会誌』33（2）：53-65.
- ，2016，「炎上加担動機の実証分析」2016 年社会情報学会（SSI）学会大会発表
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・

- 北折充隆, 1999, 「社会的迷惑に関する研究 (1)」『名古屋大學教育學部紀要・心理学』46 : 53-73.
- 吉野ヒロ子, 2015, 「『炎上』する社会 : 『炎上』報道の内容分析と意識調査から」『情報処理センター年報』18 : 105-119.
- 吉野ヒロ子, 2016, 「国内における『炎上』現象の展開と現状——意識調査結果を中心に」『広報研究』20 : 66-83.
- 吉野ヒロ子・小山晋一・高田倫子, 2018, 「ネット『炎上』における情報・感情拡散の特徴 : Twitter への投稿データの内容分析から」『広報研究』22 : 4-22.

Characteristics of participants of Online Firestorms and motivation for criticism — Study by web monitor survey —

In the past few years, online firestorm has become a social problem. Those who participate in online firestorm are known to be a very small number among internet users, but it is not clear yet which features are possessed and why they participate. In this paper, I organized the model explaining the participation in the online firestorm into three types of “diversion model” , “cyber cascade model” and “social sanction model” , and studied these models with data from two Web Monitor surveys. As a result, the following three points were clarified. (1) linguistic aggression affects whether or not to post on the net regarding online firestorm. (2) motivation to criticize the subjects in online firestorm is “festival” type similar to cyber cascade model, social “Sanction” type similar to the sanction model can be considered. (3) criticized person who is strongly motivated to participate in the “sanctions” type tends to be dissatisfied with the economic situation and to be under stress rather than others.

keywords: online firestorm, Internet outrage, electronic aggression, social media